

## 外国語活動を指導できる小学校教員の養成：教師としてのピリーフ形成の観点から

著者	福原 史子, 高橋 幸子
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要. 人間生活学・児童学・食品栄養学編
巻	37
号	1
ページ	59-75
発行年	2013
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000088/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000088/</a>

# 外国語活動を指導できる小学校教員の養成 —教師としてのビリーフ形成の観点から—

福原 史子<sup>※1</sup>・高橋 幸子<sup>※2</sup>

Prospective Elementary School Teacher Training to Lead Foreign  
Language Activities : Focusing on Constructing Teacher Beliefs

Fumiko FUKUHARA<sup>※1</sup> and Sachiko TAKAHASHI<sup>※2</sup>

The purposes of this study are to compare university students' thoughts about foreign language activities according to their grade level, and to reveal how we establish a curriculum for prospective elementary school teachers, focusing on constructing teacher beliefs. Beliefs are thought to be the best indicators of the decisions people make throughout their lives. It is important for prospective teachers to construct a strong teacher belief system in pre-service teacher training, since these beliefs seem to be more resistant to change when they go out in the field. A questionnaire of 49 items regarding students' thoughts and attitudes towards foreign language activities was distributed to students each year, from freshman to senior. Our finding showed that students in the first and second year were not confident in their English ability and had a strong anxiety about teaching foreign language activities. On the other hand, students in the fourth year thought that foreign language activities were useful for children and wanted to engage positively in these activities. However, there are still some issues remaining as for leading foreign language activities on their own as a homeroom teacher. The establishment of a more systematic curriculum throughout students' university years is required to construct teacher beliefs in order for them to communicate with native speakers, zestfully learn English, and possess the know-how to design appropriate activities for elementary school children.

Key words : Foreign Language Activities, Teacher Beliefs, Elementary School Education

## はじめに

2011 年度から小学校 5・6 年生において  
年間 35 時間実施されることとなった「外

国語活動」が、2 年目を迎えた。中等教育  
においては長い年月をかけてカリキュラム  
が作成されてきたが、小学校教育の中で外  
国語を指導することに関しては、教員養成

キーワード：外国語活動、教師としてのビリーフ、小学校教員養成

※1 本学人間生活学部児童学科

※2 本学文学部英語英文学科

の歴史も浅く、大学間で大きなばらつきがある。したがって、将来の小学校教員を養成する大学において、カリキュラム作りが急がれるのである。

小学校における外国語活動に関する全国レベルの意識調査としては、日本英語検定協会（英検）が2011年に国公立小学校教諭を中心に実施した調査<sup>1)</sup>と2010年にBenesse教育研究開発センター（ベネッセ）が全国の公立小学校の教務主任及び学級担任を対象に実施した調査<sup>2)</sup>がある。ベネッセの調査からは、68.1%の教師が外国語活動の指導に自信がないと答え、62.1%の教師が負担に感じると答えている。一方で、82.3%が児童により変化があったと回答していることから、不安や負担感を感じながらも児童にとっては有意義だと考えている実態が分かる。指導者に関しては、英語を専門とする専科がよいと72.9%が考えている（ベネッセ）にも関わらず、現状は90.4%が学級担任により指導が行われている実態（英検）である。

これまで「総合的な学習の時間」において、「英語活動」はそのほとんどがALT（Assistant Language Teacher）をはじめとする英語のできる講師が小学校に派遣される時間のみ行われる授業であったが、外国語活動の必修化により、状況は一変し、年間35時間を全てALTとのチーム・ティーチングで行うための人材と予算の確保は難しくなった。したがって、学級担任が単独で授業を行うことは避けられない。毎日児童に接し児童を理解している学級担任だからこそできる教育効果も期待されている。そこで、教員養成及び現職教員研修が大きな課題となってくるのである<sup>3)</sup>。

学級担任による外国語活動の目的を達成するうえで、大きな鍵を握るのが教師のビリーフ（信念）であると言われている<sup>4)</sup>。教師のビリーフとは、教師としての成長の過

程において中心的な役割を果たし、教育実践に変化をもたらし、一度構築されると変えることが困難なものである<sup>5)</sup>。自分が教師として成功するという確信は、自分自身が学習者として培った経験に基づいていると考えられるので、教員養成時に確固たるビリーフを構築できれば、将来にわたって持ち続け、効果的な指導をすることができる。反面、あるビリーフが構築されてしまうと、それを変えていくことは難しくなり、加えてそのビリーフが強ければ強いほど、それを変える抵抗も大きくなる（Kagan, 1992）<sup>6)</sup>。したがって、教師としての確固たるビリーフの構築に焦点を当てた教員養成が求められるのである。

本学においては、小学校教諭一種免許状の取得をめざす児童学科4年生を対象に、「外国語活動教育法」の授業を選択科目として開講し、実施2年目を迎えた。本科目の開講にあたっては、2007年、2009年、2010年の3年間にわたる児童学科3年生を対象とした意識調査に基づき、教師としてのビリーフ構築をめざしたコースデザインをしてきた<sup>7)</sup>。授業の到達目標として「①小学校外国語活動の目標と内容について系統的に学ぶことを通して、子どもが何を身に付けることをねらった活動であるかを理解する」「②英語の音声や基本的な表現等を身に付ける」「③言語や文化に関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をめざした指導法を習得する」「④教える英語力と指導力を身につけ、進んで外国語活動の指導に取り組むとともに、ALTと積極的にコミュニケーションを図ろうとする教師としてのビリーフを構築する」をあげ、附属小学校での授業参観や模擬授業、使える英語をめざしたミニレッスンの継続により、自信をもって指導できる教師としてのビリーフの構築をめざ

しているところである。

しかしながら、大学4年間を通した外国語活動を指導できる小学校教員養成のカリキュラムは本学にはまだない。カトリック教育大学として創立当初から英語教育に力を入れてきた本学の利点を生かした、独自の養成カリキュラム作りが今まさに求められているのである。

そこで本研究において、4年間を通したカリキュラムの作成にあたり、現在の1年生から4年生が外国語活動についてどのような意識をもっているか、教師としてのビリーフ構築の観点から調査することを通して、本学の実態に即した在り方を考察する。検討課題としては次の2点を設定する。

- 1) 本学児童学科の学生は外国語活動に関してどのような意識をもっているのか、学年間に意識の差はあるのか。
- 2) 本学において外国語活動を指導できる確固たるビリーフをもった小学校教員の養成カリキュラムはどう在ればよいか。

## 研究方法

本学児童学科の1年生から4年生までの学生を対象に、小学校における外国語活動に関する意識を、質問紙という量的研究方法によって観察した。

### 1. 調査対象

1・2年生については週1回のネイティブ・スピーカーによるリスニング・スピーキング中心の授業と、同じく週1回の日本人教員による講読の授業を受けている。調査は日本人教員による講読の授業中（担当：高橋）に実施した。3年生については小学校での教育実習に向けた事前指導の中で、4年生については外国語活動教育法（担当：福原）の授業の中で実施した。調査人数及びアンケートを実施した授業科目名は以下

の通りであった。

1年生	51名	英語ⅠB
2年生	50名	英語ⅢB
3年生	75名	初等教育実習事前事後指導b
4年生	32名	外国語活動教育法

### 2. 調査時期

アンケート調査は、2012年7月に実施した。この時期、1年生から3年生までは教育実習を経験しておらず、4年生に関しては対象者全員が小学校での教育実習を終えていた。加えて4年生は「外国語活動教育法」の授業を半期に渡って受講してきた。

### 3. 調査方法及び調査項目

福原・高橋（2010）<sup>8)</sup>の調査に用いた質問紙を、外国語活動必修化後の状況に対応できるように一部改変して用いることとし、その際の調査項目を以下の49項目とした。

- 1) 外国語活動に関する意識について 9項目
- 2) 外国語活動をすることによる児童への影響について 12項目
- 3) 将来児童が身に付けるべき能力・資質・態度について 9項目
- 4) 指導者について 9項目
- 5) ティーム・ティーチングをする上での学級担任の役割について 10項目

各質問項目については、類似した問題への回答による慣れの影響を回避するために、シャッフルして実施した（巻末資料参照）。リッカート4段階回答方式を用い、調査対象者は、1（まったくそう思わない）から、4（強くそう思う）までの中から自分に当てはまる答えを選ぶこととした。

### 4. 分析方法

集計に際しては、シャッフルした49項目の質問を、再び観点ごとに整理して実施した。全ての回答はコード化し、各学年に

おけるプロファイルの違いによって比較した後、学年間の回答について平均の差が大きいものを抽出して、Mann-Whitney 検定をした。また、「指導者について」の項目は、項目間の差を調べるために Wilcoxon 検定を実施した。いずれも有意水準は  $p < 0.01^{**}$  及び  $p < 0.05^{*}$  とした。

結果及び考察

1. 本学児童学科の学生は外国語活動に関してどのような意識をもっているのか、学年間に意識の差はあるのか

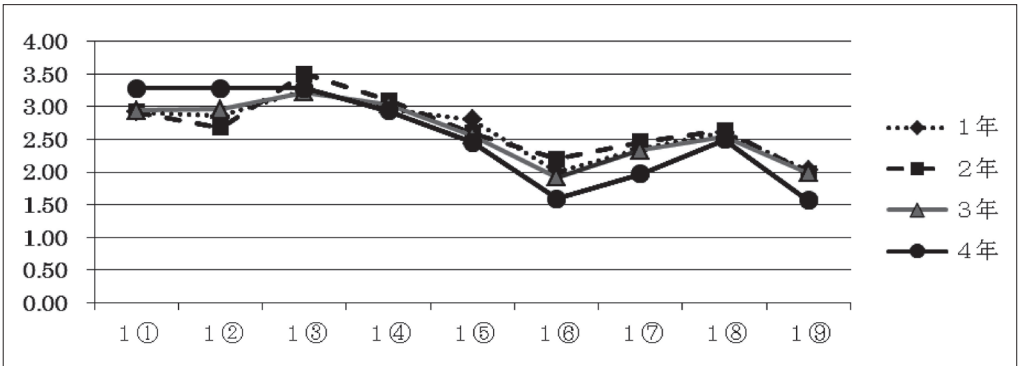
(1) 外国語活動に関する意識

図1より、1①「外国語活動の必修化は児童にとって有益である」、1②「自分自身、小学校の外国語活動に積極的に力を入れて

いきたい」、1⑥「英語よりも他の教科をしっかりと学んで欲しいので外国語活動の必修化には不満である」、1⑨「小学校で教えても英語は身に付かない」の各項目において、各学年間の意識にばらつきが概観されたので、抽出して検定（Mann-Whitney 検定）を実施した。その結果が図2～5である。

図2からは外国語活動の必修化が児童にとって有益だと思っている4年生が、他学年と比較して多いことが認められる（いずれの学年との差も  $p < 0.01$ ）。

図3からは外国語活動に積極的に力を入れていきたい4年生が、1・2年生と比較すると有意に多く（ $p < 0.01$ ）、3年生との比較においても多い（ $p < 0.05$ ）ことが分かった。



①	48. 小学校の外国語活動の必修化は児童にとって有益である。
②	2. 自分自身、小学校の外国語活動に積極的に力を入れていきたい。
③	21. 実際に自分が小学生に英語を教える立場になるとしたら不安である。
④	12. 自分自身が英語を教えるとなると、英語の授業の教材・教具等の開発や準備をするのは難しい。
⑤	29. 外国語活動に必修化によって、教えている学校と教えていない学校の差がなくなる。
⑥	32. 英語よりも他の教科をしっかりと学んで欲しいので外国語活動の必修化には不満である。
⑦	35. 早くから英語学習を始めると英語が嫌いになる恐れがある。
⑧	11. 英語は中学校や高校に入ってからでも十分身に付く。
⑨	36. 小学校で教えても英語は身に付かない。

図1 外国語に関する意識

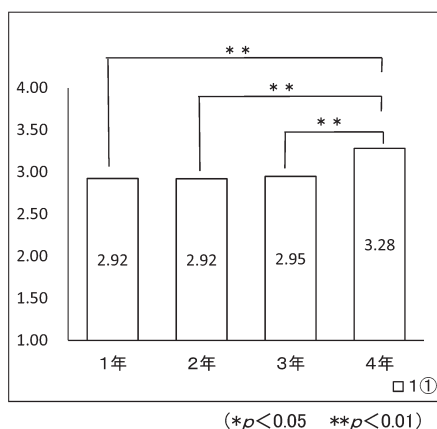


図2 外国語活動は有益である

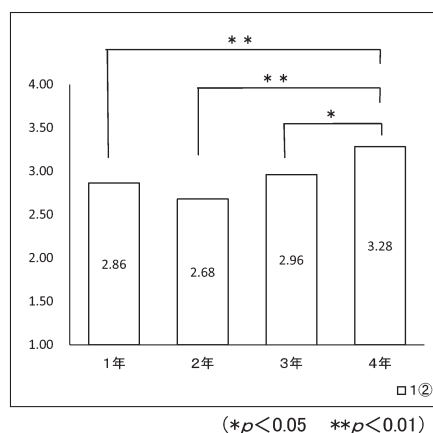


図3 積極的に力をいれたい

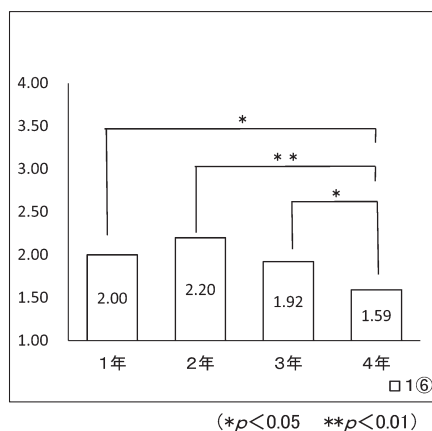


図4 必修化には不満である

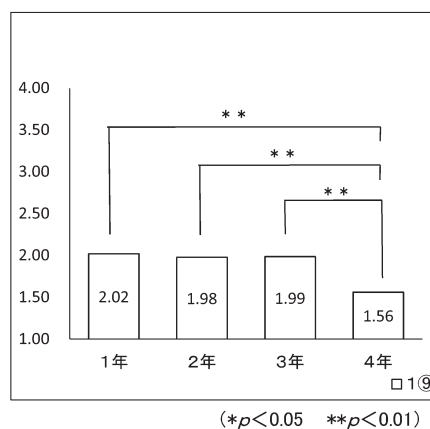


図5 小学校で教えても身に付かない

図4においては他の項目と比べて2年生が特徴的である。まず4年生と比較すると、英語よりも他の教科を学んで欲しいので必修化に不満を持つ学生が2年生に多いことが分かる ( $p < 0.01$ )。1・3年生と4年生との間にも差は認められるが、学年の中で2年生が最も英語の必修化に不満を持っていると言える。

図5からは、4年生の中で小学校から教えても英語は身に付かないと考える学生が他の学年と比べて少ないことが分かる。

以上の結果から、教育実習を通して外国語（英語）活動を観察していることや、「外国語活動教育法」の受講を通して、何をね

らいとした活動であるかを理解していること、英語の発音やリズム、教室英語等を身に付け、模擬授業も経験していることから、4年生が外国語活動に関して積極的な姿勢を示していることが窺える。

一方で1③「実際に自分が教える立場になるとしたら不安である」の項目においては、各学年差はなく、全ての学年において不安を感じている学生が多いことが分かる。前述のベネッセ（2010）の行った全国調査からも同様なことが指摘されており、不安を解消し、自信を持って外国語活動に関わっていく教員養成が急務であることが示唆される。



(2) 外国語活動をすることによる児童への影響

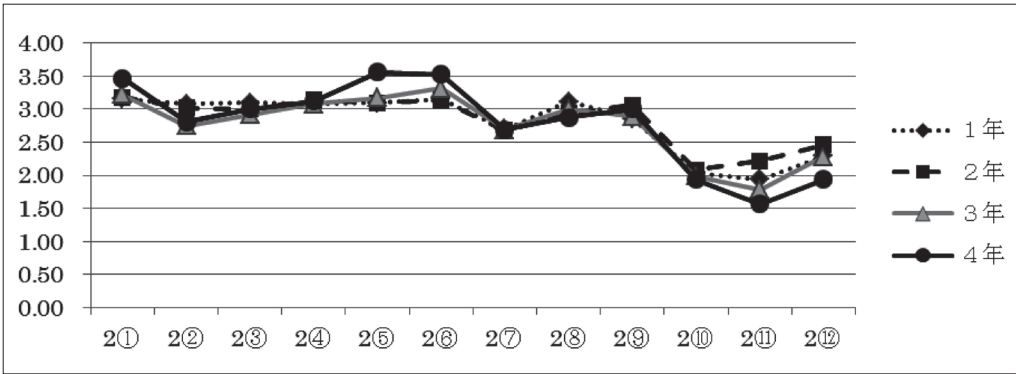
図 6 から、外国語活動を行うことで児童は 2 ⑤「英語に興味や関心を持つようになる」、2 ⑥「外国の文化などに興味や関心を持つようになる」、2 ⑪「正しい日本語を身に付けることがおろそかになる」、2 ⑫「児童の負担が増える」の 4 つの項目において学年間のばらつきが概観されたので、同じく抽出して検定をした。

図 7 から、外国語活動によって児童が英語に興味や関心を持つようになると考える 4 年生は他のいずれの学年と比べても有意 (1・2 年生  $p < 0.01$  3 年生  $p < 0.05$ ) に

多いことが分かった。

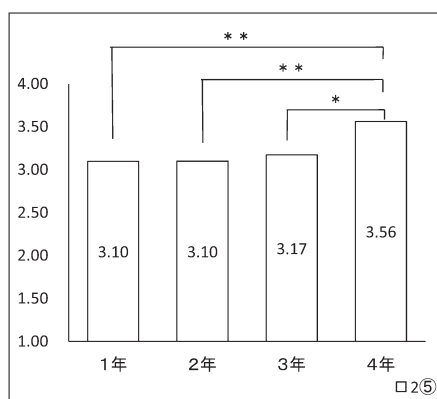
図 8 からは外国語活動によって児童が外国の文化などに興味や関心を持つようになると考える 4 年生は 1・2・3 年生に対して多い (2 年生  $p < 0.01$  1・3 年生  $p < 0.05$ ) ことが分かる。

図 9 は、外国語活動に必修化されたことで、正しい日本語を身に付けることがおろそかになると考える学生が 3・4 年生には少なく、2 年生の学生の中に特に多いことを示している。2 年生は 3 年生に対しても 4 年生に対しても  $p < 0.01$  水準で有意に多い。



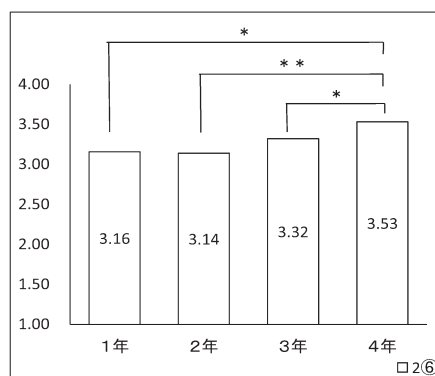
①	1. 外国語活動によって、世界観が広がる。
②	33. 外国語活動によって、英語の発音が身に付きやすくなる。
③	44. 外国語活動によって、今までより英語が身に付きやすくなる。
④	42. 外国語活動によって、外国の人とコミュニケーションしようとする態度が身に付く。
⑤	39. 小学校で外国語活動を行うことで、児童は英語に興味や関心を持つようになる。
⑥	9. 小学校で外国語活動を行うことで、児童は外国の文化などに興味や関心を持つようになる。
⑦	15. 小学校で外国語活動を行うことで、児童は外国の人に気後れすることなく、接しようとするようになる。
⑧	25. 外国語活動によって、早くから英語に触れるので英語に対する抵抗感がなくなる。
⑨	20. 外国語活動によって、中学校に入ってから英語に積極的に取り組める。
⑩	28. 小学校で外国語活動を行ったからといって、児童の将来の英語力に変化はない。
⑪	43. 外国語活動が必修化されたことで、正しい日本語を身に付けることがおろそかになる。
⑫	31. 外国語活動によって、児童の負担が増える。

図 6 外国語活動をすることによる児童への影響



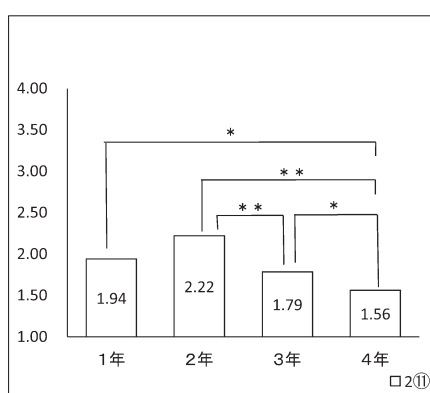
(\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$ )

図7 英語に興味や関心をもつ



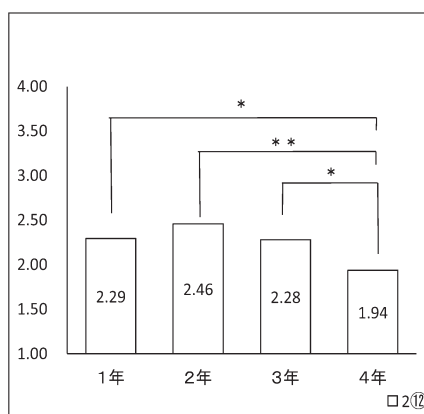
(\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$ )

図8 外国の文化に興味や関心をもつ



(\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$ )

図9 日本語がおろそかになる



(\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$ )

図10 児童の負担が増える

図10は外国語活動の必修によって、児童の負担が増えると考える学生が、4年生に少なく2年生に多いことを示している。ここでも4年生との間に2年生のみが $p < 0.01$ の差を示している。

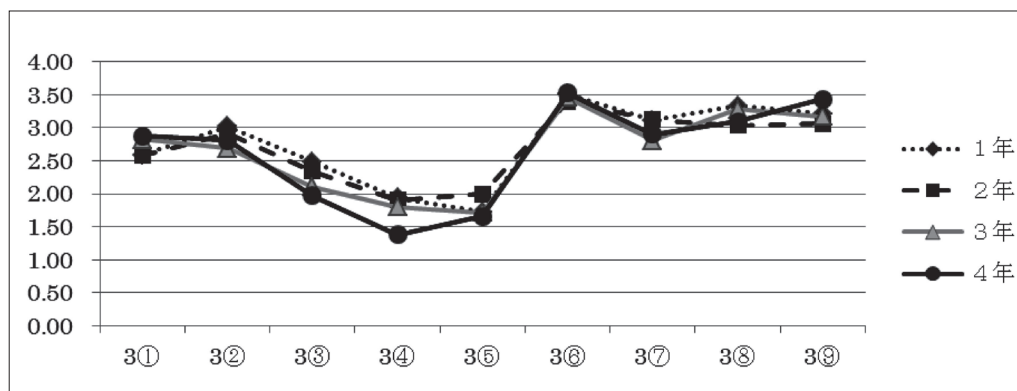
前述した外国語活動に関する意識においても2年生の中に不満を持つ学生が多かったことと一致し、学年によって意識の差があることがわかる。4年生が外国語活動の必修化に積極的な意識をもっているのは前述した通りであるが、なぜ現在の2年生に不満や児童への負担を感じる学生が多い傾向にあるのか、1年生や3年生と比較して背景にどのような違いがあるのかは、今回

の調査からは考察が及ばないので、今後継続して観察したい。

### (3) 将来児童が身に付けるべき能力・資質・態度

図11及び図12から3④「すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は英語を母語とする外国の人と同じ程度であることが望ましい」という考えについては、4年生が1・2年に比べて少ないことが分かった( $p < 0.01$ )。注意すべきは、児童の将来の目標に関する意識について、4年生が明らかに低いということである。外国語活動のねらいは外国語を通じて





- ① 23. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は、英語であいさつや簡単な受け答えができる程度だ。
- ② 4. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は外国の人と英語で日常会話や手紙、メールのやりとりができる程度でよい。
- ③ 18. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は英語を使って仕事ができる程度でよい。
- ④ 6. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は英語を母語とする外国の人と同じ程度であることが望ましい。
- ⑤ 14. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は特になく、英語が使えるようにならなくてもよい。
- ⑥ 19. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと（目標としてほしいこと）は、英語に対する抵抗感をなくすることである。
- ⑦ 27. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと（目標としてほしいこと）は、英語を聞いたり話したりする力をつけることだ。
- ⑧ 17. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと（目標としてほしいこと）は、外国の人とコミュニケーションしようとする態度を身に付けることだ。
- ⑨ 38. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと（目標としてほしいこと）は、児童の世界観を広げることだ。

図 11 将来児童が身に付けるべき能力・資質

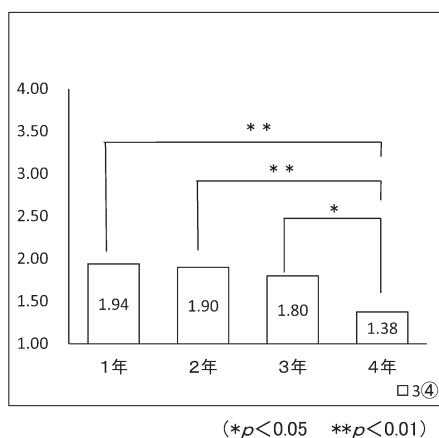
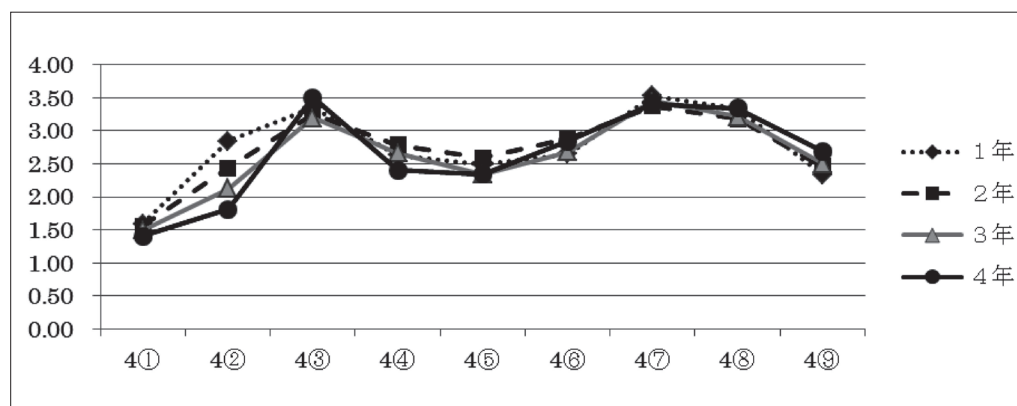


図 12 英語を母語とする人と同じ程度に

「言語や文化について体験的に理解を深める」こと、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」こと、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」ことであり、それらを踏まえた活動を統合的に体験することで、中・高等学校等における英語科の学習に繋がるコミュニケーション能力の素地を作ろうとしている<sup>9)</sup>。その先の将来の目標はどのように設定すべきか。つまり、図 11 に学生の意識として多くみられる、将来は「英語でのあいさつや簡単な受け答え (3①)」や「日

常会話やメールのやりとり（3③）」ができるレベルの目標でよいのであろうか。ベネッセ（2012）の調査からも同じような傾向が示されており、児童が大人になるまでに身に付けるべき英語力として48.5%が「あいさつや簡単なやりとり」、37.9%が「日常生活でコミュニケーションができる程度」と回答しており、「必ずしもすべての子どもが身に付ける必要はない」との回答が9.7%、「仕事でつかえる程度」との回答はわずか3%でしかない。その程度の目標

であるならば、近隣諸国の英語戦略に到底及ばないであろう。反面、「英語を使って仕事ができる（3③）」レベルや「英語母語話者と同じ程度（3④）」レベルまで求めると教師も児童も負担感を感じるようになる。小学校において学級担任が外国語活動を指導するにあたり、将来のヴィジョンをそれぞれの教師がどのように持てばよいのか、その上で小学校においてどのような活動が実践できるのか、重要な課題である。



- |   |  |
|---|--|
| ① | 7. 外国語活動の指導にあたるのは学級担任だけがよい。  |
| ② | 40. 外国語活動の指導にあたっては、小学校の教員でありながら、中学校や高校の教員のように教科担任のような形で、英語を専門に教える人がよい。 |
| ③ | 5. 外国語活動の指導にあたっては、学級担任と英語を話すネイティブスピーカーの人とのチームティーチングがよい。                |
| ④ | 47. 外国語活動の指導にあたっては、学級担任と英語を専門に教える小学校教員とのチームティーチングがよい。                  |
| ⑤ | 22. 外国語活動の指導にあたっては、学級担任と英語が得意な地域の日本人とのチームティーチングがよい。                    |
| ⑥ | 34. 小学校には、英語を教えることのできる先生は少ない。  |
| ⑦ | 10. 英語を教えていくにあたり、学級担任の英語力や指導力の向上をさせる必要がある。                             |
| ⑧ | 46. 英語を教えていくにあたり、教員研修を充実させる必要がある。                                      |
| ⑨ | 30. 教員間や、ALT など外部の協力者との打ち合わせ時間を確保することは困難である。                           |

図 13 外国語活動の指導者について

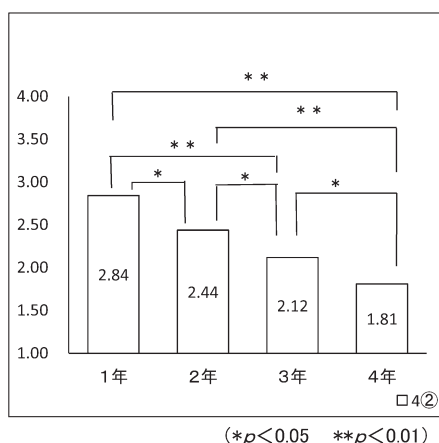


図 14 指導は英語を専門に教える人がよい

#### (4) 指導者について

外国語活動の指導は誰が行えばよいかという質問において、図 13 からは 4②「小学校の教員でありながら、中学校や高校の教員のような形で、英語を専門に教える人がよい」の項目で学年間の差がみられる。図 14 のように 1・2 年生と 4 年生、1 年生と 3 年生の間で有意差 ( $p < 0.01$ ) が認められ、学年が低いほど肯定的である。総合的な学習の時間において国際理解に関する教育の一環として英語活動に取り組んだ経験のある現在の学生だが、1・2 年生は英語教育と言えば中・高等学校で受けてきた授業のイメージが強く、専科の教師が担当することが望ましいとの意識が強いと考える。外国語活動の指導法を学んだ 4 年生では、学級担任による指導が求められていることを知った上での回答だと考えられる。

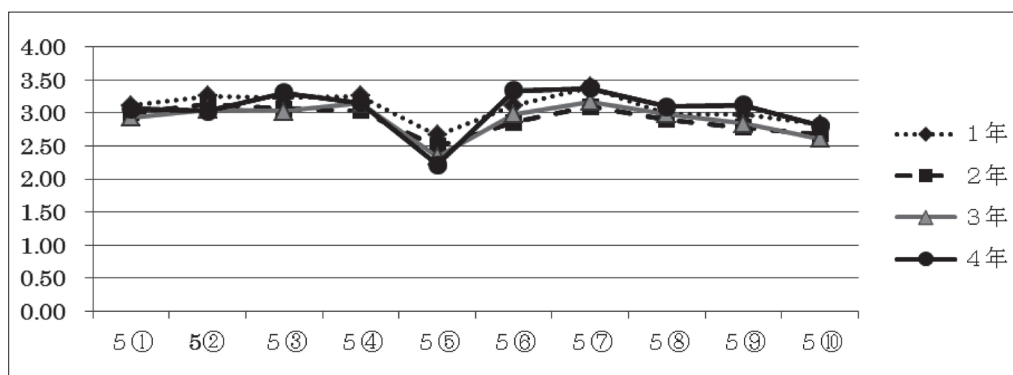
項目間を比較 (Wilcoxon 検定) すると、どの学年においても「学級担任とネイティブ・スピーカーとのチーム・ティーチング」が最もよい ( $p < 0.01$ ) との認識であった。「学級担任のみ」による指導がよいとの回答はどの学年においても最も低かった ( $p < 0.01$ )。「英語を専門に教える人」「学級担任と英語を専門に教える人とのチーム・ティーチング」「学級担任と英語が得

意な地域の日本人とのチーム・ティーチング」は中間に位置し、それぞれの間で顕著な差は認められなかった。

つまり、学生たちは「学級担任とネイティブ・スピーカーとのチーム・ティーチング」を最も望んでおり、「学級担任のみ」の指導は最も望んでいないことになるが、小学校における実態は、英検 (2011) に示されるように、90.4% が学級担任によって指導されていることになる。文部科学省 (文科省) も、学級担任が外国語活動の指導ができるよう、本年度から教材となった「*Hi, friends*」のデジタルコンテンツの配布や、全ての単元の計画や全ての lesson の指導案の pdf をホームページ上で公開<sup>10)</sup> する等、手軽に利用できるサポートをしているところである。

#### (5) チーム・ティーチングをする上での学級担任の役割

図 15 より、この項目については、学年間の差は認められなかった。しかし、5⑤「チーム・ティーチングをする上で学級担任の役割は、英語と日本語の違いを児童に伝えることである」においては、どの学年においても平均値が低かった。学級担任の役割としては、違いを伝えるのではなく、児童の興味・関心や期待を把握したり、困っている児童に気づいて助けたり、学習者としてのよきモデルを示したりすることがよいと考えていることが窺えるが、5⑤の他には学年間にも項目間にも目立った差はなく、深く意識していないと考えられる。ALT とのチーム・ティーチングをする場合には、ALT に最初から授業を任せてしまうのではなく、学級担任が中心となった指導ができるよう、チーム・ティーチングの在り方について学ばなければならない。また効果的な指導をするためにも、ALT と意思疎通が図れる程度の英語力が求められることになる。



- |   |   |
|---|---|
| ① | 3. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、必要最低限の日本語で指示や助言を与えて、児童が内容を理解できるよう支援することである。     |
| ② | 8. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、活動の中で必要と思われる時、ジェスチャーを用いたり、わかりやすい英語に言い換えをすることである。 |
| ③ | 13. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、児童そのものや、児童がもっている興味関心について注意をはらうことだ。             |
| ④ | 24. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、英語の使い方や表現について、児童の助けとなるような情報を与えることだ。             |
| ⑤ | 26. ティームティーチングをする上での小学校教員の役割は、英語と日本語の違いを児童に伝えることである。                        |
| ⑥ | 45. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、児童の実態や、児童が英語学習に対してどんな期待を持っているかを知らうすることだ。        |
| ⑦ | 49. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、活動の中で、児童がわかりにくいと感じる部分を予測し、そう感じないように工夫することである。  |
| ⑧ | 16. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、授業の中で、どこが難しいかを理解して、ALT に伝えることだ。                |
| ⑨ | 37. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、英語を使ってコミュニケーションをするモデルを児童に示すことである。               |
| ⑩ | 41. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、自らが外国語学習者としてのよいモデルを児童に示すことである。                 |

図 15 ティーム・ティーチングをする上での学級担任の役割

## 2. 本学において外国語活動を指導できる確固たるビリーフをもった小学校教員の養成カリキュラムはどう在ればよいか

アンケート調査から、1・2年生（特に2年生）においては、外国語活動の必修化は児童の負担を増やし、他教科の学習が疎かになるので不満であると考える学生が多い傾向があり、反対に4年生は積極的に取り組む姿勢を示す傾向が観察された。3年生

については、1・2年生ほど不満や不安が多いわけではないが、4年生ほどの積極性は観察されなかった。外国語活動の必修化に意義を見出せない限りは、英語の学習にも英語の指導力の向上にも身を入れることはできない。早い学年から、外国語活動は児童にとってたいへん有益であるとする確固としたビリーフを持ち、積極的に指導ができる教師育成を目指したカリキュラムが必要である。

誰が指導するかについては、全ての学年において、学級担任と ALT とのチーム・ティーチングが望ましいと捉えられ、学級担任単独での指導は望んでおらず、自らが学級担任として単独で指導することに不安を感じる学生が多く観察された。

小学校の現状から、年間 35 時間をチーム・ティーチングで行うことは難しく、学級担任が外国語活動の指導をすべき状況である。これは、外国語活動が指導できる教師が学校現場に求められているということである。加えて、ALT とのチーム・ティーチングを効果的に行うためにも、英語でスムーズに意思疎通できる力が必要であることから、大学 1 年次からの取り組みが求められる。大学 4 年間を通したカリキュラム作成が急がれるのである。そこで、本学における外国語活動を指導できる小学校教の養成カリキュラムの在り方について検討したい。

### (1) 1 年次：英語Ⅰ A・Ⅱ A・Ⅰ B・Ⅱ B

教える英語力の土台となる基礎英語力の向上が求められる。週 2 回の授業のうち、1 回はリーディング中心の講読の授業、もう 1 回はネイティブ・スピーカーの教員によるリスニングとスピーキング中心の授業である。現在本学では、この授業の見直しが進められており、placement test による目的別、能力別のクラス編成も検討されつつある。小学校教師を目指す児童学科の学生に合致した到達目標と授業内容を提供することも可能ではないかと考える。

### (2) 2 年次：英語Ⅲ A・Ⅳ A・Ⅲ B・Ⅳ B

授業の形態としては 1 年次と同じであるが、1 年次よりもさらに外国語活動を指導できる英語力に特化した授業を創ることができるのではないか。週 1 回のネイティブ・スピーカーの教員による授業の中で、ALT とのコミュニケーションを想定した

内容や、クラスルームイングリッシュ活用力や発音指導等が組み込めるのではないかと考える。また、講読においても、海外の英語教育や心理学、児童福祉学、芸術等を取り上げて学ぶことも可能であろう。

小学校外国語活動に対応した内容とは、小学校レベルの英語を学ぶわけではなく、音声や表現を中心とした授業を創造していくことのできる英語力を身に付けることである。

### (3) 3 年次：外国語活動教育法

現在 4 年生 1 期の選択必修の科目である「外国語活動教育法」の授業を教育実習前の集中講義及び 2 期に開講することを検討中である。アンケート調査から明らかにように、3 年生は外国語活動に対して不満や負担感が大きいわけではないが、積極的に指導しようとする気概にあふれているわけでもない。それまでに外国語活動に接する機会が少ないことが原因としてあげられる。そのため、教育実習で英語を指導できる機会があっても、躊躇したり、過度な不安を感じたりする学生が見られる。指導法を学んでいないので無理もないことである。そこで、教育実習直前の集中講義を通して、目標や内容について理解を深め、教材研究をすることができれば、実習に臨む姿勢にも変化があるのではなかろうか。さらに、教育実習での経験を持ちより学びを深めることができれば、将来学級担任として積極的に外国語活動を指導しようとする教師のビリーフ形成に繋げていくことが可能だと考える。

### (4) 4 年次：より実践的な演習へ

3 年次での学びを基に 小学校の現場とより連携した実践的な学びができないか、検討中である。具体的には、現役の小学校教諭に外国語活動の実践演習の指導をお願いしたり、実際に授業に関わらせて頂いた



りする機会を模索しているところである。具体的な実践の場としては、附属小学校と公立小学校が考えられるので、以下にそれぞれの場における実践的な学びについて考察を進めたい。

#### (5) 小学校との連携

附属小学校においては、英語が1・2年生は週2回、1回は英語専科の教師による授業、もう1回はネイティブ・スピーカーの教師と学級担任によるチーム・ティーチングの授業の形式で行われている。また、3年生以上は週3回、英語専科の教師による授業、ネイティブ・スピーカーの教師と学級担任による授業、ネイティブ・スピーカーの教師と英語専科の教師によるチーム・ティーチングの授業の形で行われている。さらに国際コースにおいては、英語と算数と理科の授業をネイティブ・スピーカーの教師による英語で進められている。いきなり国際コースに学校支援ボランティアとして入らせて頂くのは難しいかもしれないが、それぞれの学生の目的や能力に応じたクラスで、実践的な学びができるのではないかと。大学と附属小学校が連携し協力し合える機会を創りだしていきたい。

公立小学校においても、岡山市立石井小学校のように特色のある教育としてイマージョン教育を行っている学校がある。また、2011年度からは外国語活動が必修化されているので、全ての小学校の5・6年生において外国語活動が行われている。学校支援ボランティアやインターンシップとして関われる機会を検討したい。また学生自らが主体的に探し出してほしい。

#### (6) 地域の小学生を対象にした取り組みへの参加

岡山市は昨年度より「おかやまイングリッシュビレッジ事業」を始めている。本

年度は、8月18日から19日の1泊2日で、犬島自然の家において「イングリッシュビレッジ in 犬島」を開催した。また、11月23日には旧福谷小学校において「イングリッシュビレッジ in 福谷」が開催される。そこでは、外国人スタッフを招いてコミュニケーションを図りながら異文化体験活動や外国の生活体験活動、自然体験活動などを行っている。岡山県県民生活部国際課も、本年度より「English Camp in OKAYAMA」をスタートさせている。このような行政と協力した実践的な取り組みが本学でもできないか。本学独自の開催も視野に入れて考えていく必要がある。

#### (7) 世界へ

本学では、夏期に1か月間のカナダビクトリア大学への短期研修が実施されており、毎年児童学科からも参加がある。海外での生活を実際に経験することは、日常的に英語が使われている場面における活用力の面からも、またいろいろな生活習慣や考え方にふれ視野を広げる面からもたいへん貴重な機会である。ぜひ多くの学生にこの機会を活用してほしい。民間の海外研修プログラムも数多くある。

その他の学びのスタイルとしてe-learningが考えられる。これにより、学習する場所も時間も自ら自由に設定することができる。英語力や英語活用能力を身に付けたいと思えば、いくらでも機会があり、自分に適した学習内容や方法を見つけることができるのである。

留学や短期留学については他にも多くの機会があると考えられる。e-learningについても、整理し考察するには至っていないので、どのような活用方法があり、どのように学生の学びを支援できるのかについては今後の課題としたい。

## おわりに

メディアの発達した今日の社会において、自ら英語を学習したいという意欲があれば、たくさんの情報が手に入り、いつでもどこでも好きな時に学ぶことができる。文科省もデジタルコンテンツを各学校に配布したり、ホームページ上に多くの授業作りの資料を提供したりして、学級担任が外国語活動を指導できるように支援している。しかしながら、せっかくのデジタルコンテンツも、使い方やそのよさを知らなければ、開くことさえできないし、開こうとしないであろう。外国語活動の指導に関しても、教師自らがその意義を実感として捉えなければ、指導は負担以外の何ものでもなくなってしまう。外国語活動は児童にとっても教師自身にとっても意義深い活動で、自ら英語力を高め、楽しんで積極的に指導しようとする教師としてのビリーフを大学時代に形成することがいかに重要であるか明らかである。

今後は、本学における外国語活動が指導できる教員養成のカリキュラムを稼働できるよう力を尽くしたい。また、取り組みの成果を分析し、さらに改善していくためにも、本調査の結果及び質問項目を活用した研究を進めていきたい。

## 引用文献

- 1) 日本英語検定協会：小学校外国語活動に関する現状調査＜小学校対象＞調査報告，東京，日本生涯学習総合研究所，2011.
- 2) Benesse 教育研究開発センター：第2回小学校英語に関する基本調査報告書

(教員調査)，東京，ベネッセコーポレーション，2011.

- 3) 金森強：小学校における英語導入の背景と現状、課題，小学校教育の進め方―「ことばの教育」として，初版，第1部，第2章，成美堂，2008，pp.16-21.
- 4) 岡秀夫：はじめに，小学校教育の進め方―「ことばの教育」として，初版，成美堂，2008，pp.3-5.
- 5) Longman dictionary of language teaching and applied linguistics, 2003.
- 6) Kagan, D. M. : Implications of research on teacher belief, Educational Psychologist, 27, 65-90 (1992) .
- 7) 福原史子・高橋幸子：小学校外国語活動教育法のコースデザイン―教師としての確固たるビリーフの構築のために―，ノートルダム清心女子大学紀要，人間生活学・児童学・食品栄養学編，35 (1)，57-71 (2011) .
- 8) 同上書
- 9) 文部科学省：小学校学習指導要領解説，外国語活動編，2008.
- 10) 文部科学省：“Hi, friends !” 関連資料＜[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm)＞(2012年9月30日)

## 付 記

本研究は、文部科学省科学研究費助成事業、学術研究助成基金助成金・基礎研究(C)「小学校教員養成課程における外国語活動に対応した教員のビリーフ形成プログラム開発」(2011～2013年度 課題番号23520574 代表者井狩幸男)の助成を受けた研究の一部である。



## (資料) 小学校における外国語活動に関する質問紙

本調査は、2011 年度から小学校で必修化されている外国語活動について、小学校教師を目指す大学生がどのように感じているのかを調べる目的で作成しています。

＊結果は統計処理されます。

平均値などの結果が学会発表や論文で使用されることはありますが、個人情報公にされることはありません。

性別（男・女） いずれかに○

大学名（ ノートルダム清心女子大学 ） 回生（ ）

専攻・コース等（ 児童学科 ）

今まで受けた習熟度テスト（ ）

例 英検 2 級（高 1）

教育実習経験（あり・なし） いずれかに○

これから 49 項目の質問をします。

あてはまるものに、○をつけてください。

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

全くそう思わない      あまりそう思わない      そう思う      とてもそう思う

1. 外国語活動によって、世界観が広がる。	1	2	3	4
2. 自分自身、小学校の外国語活動に積極的に力を入れていきたい。	1	2	3	4
3. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、必要最低限の日本語で指示や助言を与えて、児童が内容を理解できるよう支援することである。	1	2	3	4
4. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は外国の人と英語で日常会話や手紙、メールのやりとりができる程度でよい。	1	2	3	4
5. 外国語活動の指導にあたっては、学級担任と英語を話すネイティブスピーカーの人とのチームティーチングがよい。	1	2	3	4
6. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は英語を母語とする外国の人と同じ程度であることが望ましい。	1	2	3	4
7. 外国語活動の指導にあたるのは学級担任だけがよい。	1	2	3	4
8. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、活動の中で必要と思われる時、ジェスチャーを用いたり、わかりやすい英語に言い換えをすることである。	1	2	3	4
9. 小学校で外国語活動を行うことで、児童は外国の文化などに興味や関心を持つようになる。	1	2	3	4
10. 英語を教えていくにあたり、学級担任の英語力や指導力の向上をさせる必要がある。	1	2	3	4

11. 英語は中学校や高校に入ってからでも十分身に付く。	1	2	3	4
12. 自分自身が英語を教えるとなると、英語の授業の教材・教具等の開発や準備をするのは難しい。	1	2	3	4
13. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、児童そのものや、児童がもっている興味関心について注意をはらうことだ。	1	2	3	4
14. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は特になく、英語が使えるようにならなくてもよい。	1	2	3	4
15. 小学校で外国語活動を行うことで、児童は外国の人に気後れすることなく、接しようとするようになる。	1	2	3	4
16. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、授業の中で、どこが難しいし、いかを理解して、ALT に伝えることだ。	1	2	3	4
17. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと(目標としてほしいこと)は、外国の人とコミュニケーションしようとする態度を身に付けることだ。	1	2	3	4
18. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は英語を使って仕事ができる程度でよい。	1	2	3	4
19. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと(目標としてほしいこと)は、英語に対する抵抗感をなくすことである。	1	2	3	4
20. 外国語活動によって、中学校に入ってから英語に積極的に取り組める。	1	2	3	4
21. 実際に自分が小学生に英語を教える立場になるとしたら不安である。	1	2	3	4
22. 外国語活動の指導にあたっては、学級担任と英語が得意な地域の日本人とのティームティーチングがよい。	1	2	3	4
23. すべての児童が社会に出るまでに身に付けるべき英語力は、英語であいさつや簡単な受け答えができる程度だ。	1	2	3	4
24. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、英語の使い方や表現について、児童の助けとなるような情報を与えることだ。	1	2	3	4
25. 外国語活動によって、早くから英語に触れるので英語に対する抵抗感がなくなる。	1	2	3	4
26. ティームティーチングをする上での小学校教員の役割は、英語と日本語の違いを児童に伝えることである。	1	2	3	4
27. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと(目標としてほしいこと)は、英語を聞いたり話したりする力をつけることだ。	1	2	3	4
28. 小学校で外国語活動を行ったからといって、児童の将来の英語力に変化はない。	1	2	3	4
29. 外国語活動に必修化によって、教えている学校と教えていない学校の差がなくなる。	1	2	3	4
30. 教員間や、ALT など外部の協力者との打ち合わせ時間を確保することは困難である。	1	2	3	4
31. 外国語活動によって、児童の負担が増える。	1	2	3	4
32. 英語よりも他の教科をしっかりと学んで欲しいので外国語活動の必修化には不満である。	1	2	3	4

33. 外国語活動によって、英語の発音が身に付きやすくなる。	1	2	3	4
34. 小学校には、英語を教えることのできる先生は少ない。	1	2	3	4
35. 早くから英語学習を始めると英語が嫌いになる恐れがある。	1	2	3	4
36. 小学校で教えても英語は身に付かない。	1	2	3	4
37. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、英語を使ってコミュニケーションをするモデルを児童に示すことである。	1	2	3	4
38. 小学校の外国語活動で目標とすべきこと(目標としてほしいこと)は、児童の世界観を広げることだ。	1	2	3	4
39. 小学校で外国語活動を行うことで、児童は英語に興味や関心を持つようになる。	1	2	3	4
40. 外国語活動の指導にあたっては、小学校の教員でありながら、中学校や高校の教員のように教科担任のような形で、英語を専門に教える人がよい。	1	2	3	4
41. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、自らが外国語学習者としてのよいモデルを児童に示すことである。	1	2	3	4
42. 外国語活動によって、外国の人とコミュニケーションしようとする態度が身に付く。	1	2	3	4
43. 外国語活動が必修化されたことで、正しい日本語を身に付けることがおろそかになる。	1	2	3	4
44. 外国語活動によって、今までより英語が身に付きやすくなる。	1	2	3	4
45. ティームティーチングをする上で学級担任の役割は、児童の実態や、児童が英語学習に対してどんな期待を持っているかを知ろうとすることだ。	1	2	3	4
46. 英語を教えていくにあたり、教員研修を充実させる必要がある。	1	2	3	4
47. 外国語活動の指導にあたっては、学級担任と英語を専門に教える小学校教員とのティームティーチングがよい。	1	2	3	4
48. 小学校の外国語活動の必修化は児童にとって有益である。	1	2	3	4
49. ティームティーチングをする上での学級担任の役割は、活動の中で、児童がわかりにくいと感じる部分を予測し、そう感じないように工夫することである。	1	2	3	4